

## 春を彩る ひなと酒田の土人形

展示期間 令和3年2月20日～4月5日

### 開催にあたって

酒田の土人形として知られる「鶺鴒渡川原人形」。江戸時代の末期に旧鶺鴒渡川原村（現在の酒田市亀ヶ崎）の大石助右衛門が作り始めたと伝えられ、大石家では代々、雛人形をはじめ、昔話や日本の神話の登場人物、七福神などの縁起物など、さまざまなモチーフの人形を作っていました。

高価できらびやかな雛人形を買うことができなかった庶民にとって、素朴な鶺鴒渡川原人形は手近な存在であり、毎年、子どもの健やかな成長を願って一体また一体と買い求めて飾り付け、ひな祭りを楽しみました。子どもの名前や人形の購入日を背面などに記した古い人形も残っています。

今回の企画展では、江戸時代後期から明治初期の古今雛や享保雛などとともに、鶺鴒渡川原人形、戦後に広田地区で作られていた「広田人形」などの土人形を展示します。また大石家より資料館に寄贈された鶺鴒渡川原人形の土型と木型を展示し、鶺鴒渡川原人形の歴史や製作工程も紹介します。



### 旧家に伝わった雛人形

河村瑞賢によって西廻り航路が整備され、江戸や大坂と直結するようになった酒田は港町として繁栄しました。最上川流域の米や特産品を運んだ北前船は、塩や木綿、茶、古着などの日用品を積んで酒田へ戻りました。その積荷とともに雛人形が運ばれてきたと考えられます。江戸や京都で作られた見事なつくりの雛人形は、廻船問屋などの豪商に買い求められ、現在まで大切に伝えられてきました。

### 京都の雛人形と江戸の雛人形

酒田は京都・大阪との交易が盛んで、酒田湊に入った京都製の雛人形が裕福な一般の家にも渡って愛好されました。京都から船で運ばれたものは手を加えていないので優れた物が残っています。

江戸から陸路を通過して入ったものは国境の峠を越さなければならぬため、荷物を出来るだけ小さくし、また人形の破損を防ぐために頭や手足、付属品を解体して運び込み、それを土地の人形師が組み立てる方法を取っていました。

## 雛人形の種類

### 享保雛（きょうほうびな）

江戸中期、享保（1716～1736）の頃に流行したといわれる雛人形。享保雛という名前は明治時代につけられました。制作時代は享保年間に限っているわけではなく、明治になっても制作・販売されています。町屋などで飾られ、大型のものが多く製作されました。装束は金襴(きんらん)や錦を使い、男雛は袖を張り、太刀をさし、笏(しゃく)を持ちます。女雛は冠をかぶり、檜扇(ひおうぎ)を持ち、五衣(いつつぎぬ)、唐衣(からぎぬ)姿で袴(はかま)は綿を入れて、大きく高く膨らませているのが特徴です。

### 古今雛（こきんびな）

江戸時代後半に製造が始まった江戸製の雛人形。明和年間（1764～1772）頃、江戸・池ノ端の雛人形問屋・大榎屋半兵衛(おおつちやはんべえ)が十軒店(じっけんだな)の人形師、原舟月(はらしゅうげつ)に作らせて売り出しました。それまでの雛の衣装を一層華やかにして、金糸・色糸などで縫いとりをほどこして仕上げており、顔も写実的で眼にガラスなどをはめ込み精巧に作られています。江戸っ子の雛人形として大流行し、京・大坂でも人気を得ました。古今雛という名前は大榎屋が売り出すときに付けたものです。

### 芥子雛（けしびな）

江戸時代中期以降に流行った小形の雛で、3寸（約10センチ）以下のものをいいます。大形の雛が幕府によってたびたび禁止されたため小型化し、芥子粒のように小さいことから芥子雛と呼ばれました。

### 立雛（たちびな）

雛人形のルーツとも言える、紙でできたお雛様です。平安時代、人の形をした紙などに自身の厄や災いを移して川や海に流す「流し雛」という行事が行われていました。江戸時代になり、人形作りの技術が発展すると、より精巧で豪華なものになり、雛人形は川に流さず室内に飾る、現在のような形に変化していきました。



## 資料館のお雛様



### 田中家のお雛さま（江戸時代～明治期）

田中家は元禄期より続く酒田の旧家であり、昭和期まで酒造業を営んでいました。

江戸製の古今雛はぱっちりとした目でやさしげな表情をしており、華やかな着物を着ています。江戸後期～明治期の制作と考えられます。京都製の古今雛は切れ長の目をしており、高貴で品のある表情です。江戸時代の制作と考えられます。雛人形を納めていた木箱は、江

戸～明治期に使用された海上輸送用の茶箱を転用したものと思われます。蓋には「嘉永」の文字がありますが、雛人形の時代と一致するかは不明です。



江戸製の古今雛



京都製の古今雛

### 橋本家のお雛さま（江戸時代後期）

橋本家は酒田の銘酒「上喜元」の酒造元です。お雛祭りの季節は、杜氏をはじめ、蔵人たちが酒造りに勤しむ時期ですが、戦前から、このお雛さまが橋本家のお座敷に飾られるのを楽しみに、お雛見を訪れる方々も多かったそうです。

お内裏様の頭部は京都製、胴体は江戸製で、江戸時代後期の作と思われます。



### 古今雛（江戸～明治期）

江戸製の古今雛です。顔は写実的で、女雛の着物には金糸や銀糸で施された華やかな刺繍がみられます。



### 宇野家の芥子雛

このお雛様を収納している木箱の墨書きから、明治22年（1889）に購入されたことが分かります。



立雛（年代不明）



享保雛（江戸時代／制作地不明／寄託品）



## 酒田の土人形

### 鵜渡川原人形の歴史

素朴な風合いで酒田の人々に親しまれてきた土人形・鵜渡川原人形は、江戸時代の末頃に、酒田で鋳物業(いものぎょう)を営んでいた大石助右衛門(おおいしすけえもん)によって創始されました。土人形は全国各地に郷土玩具として残っていますが、その由来は京都伏見稲荷詣での土産物であった「伏見人形(ふしみにんぎょう)」とされています。鵜渡川原人形もまた、北前船の交易を通して上方からもたらされた土人形の影響を受けていると考えられます。

鵜渡川原人形という名前は、旧鵜渡川原村(現酒田市亀ヶ崎)で作っていたことに由来します。

助右衛門の時代には人形の型は木型を使っていました。そのなかには文政期(1818～29)の銘があり、「人形屋(後藤)長吉」や「人形屋九三郎・とら能」という名前が記されているものがあります。これらの人物がより早い時期に酒田で土人形作りを始め、その木型が何らかの理由で大石家に伝わったと考えられています。

大石家は、助右衛門の長男助蔵から続く本家と、次男孝之助から続く分家とで土人形作りをしてきました。三男の木山周蔵も土人形作りをしています。孝之助は周蔵とともに、土人形の原形から土型を作る手法を始めたといえます。現在、本家の土型110点・木型31点、分家の土型295点は、当館で保存しています。

平成3年に分家の大石文子氏が亡くなり、平成7年には本家の大石定佑氏が制作を中断しましたが、定佑氏の妻やゑ氏が引き継ぎ、平成11年にはやゑ氏を顧問に迎え「鵜渡川原人形保存会」(現鵜渡川原人形伝承の会)が発足し、鵜渡川原人形の保存と普及活動を行っています。

## 鵜渡川原人形の木型（江戸時代後期）

最初期の鵜渡川原人形の制作には木型が使われていました。土型に比べて種類が少なく、人形が小さく仕上がるのが特徴です。これは、木型を作るには彫刻の技術が必要とされ、新しく型を創作したり、大きいサイズに作り直したりすることが難しかったためと考えられます。

資料館では大石家より寄贈を受けた、江戸時代後期の文政3～6年（1820～1823）の銘が残るものを含む、木型31点を所蔵しています。



木型 大黒



木型 飾り馬

## 鵜渡川原人形ができるまで

### ①人形おこし・合わせ・耳とり

人形の型に雲母(うんも)の粉を薄く敷いた後、粘土を詰めて「人形おこし」をします。粘土は型の中だけに詰めるのではなく、はみ出す部分(耳)も付けます。正面と背面それぞれの型に粘土を詰めたら、合わせ目と耳の部分に筆で水を塗って合わせます。くっついたら型から外し、耳の部分を指でかきとって整えます。



鵜渡川原人形の土型

### ②乾燥・焼き

一週間ほど乾燥場で陰干しを行い、適度に乾いたものから取り込みます。すべての人形の乾燥を終えたら、焼きの工程へ。かまどの中に人形をまんべんなく積み入れ、およそ3時間焼きます。人形おこしから焼きまでの工程を、秋までにまとめて作業します。

### ③胡粉(ごふん)かけ

焼きで生じた小さなひび割れを石膏(せっこう)と薄葉紙(うすばがみ)を使って補修してから、「胡粉かけ」の工程に移ります。水で溶き火で温めた胡粉を、杓子(しゃくし)で人形全体にかけ、その後刷毛(はけ)でまんべんなく塗ります。胡粉かけは3回から4回繰り返して行います。顔の部分には体部よりも上質な胡粉をさらに塗り重ねます。

### ④色付け、顔かき・髪塗り

鶺鴒渡川原人形の色付けには、水に溶いて温めた泥絵具と、溶かした膠を混ぜて使用します。膠が冷えて固まらないように加熱しながら筆で色付けをします。はじめに衣服や道具などに色付けし、背面には色を塗りません。効率よく作業を行うために、同じ人形はまとめて色付けをします。

仕上げに墨で髪塗り・顔描きをします。顔は人形の命なので、極細の面相筆を使って特に慎重に描きます。

## 鶺鴒渡川原人形の色付けに使う道具

### ●膠(にかわ)

泥絵具を人形の表面に塗るために使う接着剤です。牛の骨や皮、腱を原料としています。水につけてふやかしたあと、加熱し溶かして使用します。

### ●胡粉(ごふん)

貝殻を原料とする顔料です。水で溶き、火で温めてつかいます。人形の下塗りに使うことで、表面を白く滑らかにします。

### ●泥絵具(どろえのぐ)

鉱物や貝殻を原料とする顔料で、古くから日本画などに使用されてきました。膠液を混ぜて使用します。

### ●筆

筆を使って人形に色を付けます。肌や衣服を塗るための筆と、細かな表情を描くための面相筆があります。

## さまざまな姿の人形たち

節句を祝う雛人形をはじめ、縁起の良い吉祥人形や、時代を反映した子どもたちの姿の人形など、鶺鴒渡川原人形の種類は200余もあります。なかでも木山金之助(大石助右衛門の三男周蔵の息子)は、昔話を題材にした人形作りや「庄内おぼこ」など大石家本家オリジナルの型の原型作りを手掛け、鶺鴒渡川原人形の種類をいっそう豊かにしました。

それらの人形は、子どもが生まれた時にその子のための人形として一体また一体と少しずつ買いそろえられました。人形の背中や底面には、人形を購入した日付や、買主、子どもの名前などを書き入れることもありました。

### 鵜渡川原人形のお雛人形

裕福な家庭では古今雛や享保雛などの豪華なお雛様買い求められた一方で、庶民の間では素朴な土人形のお雛様親しまれました。

大石家の本家（右）と分家（左）では、お雛様の着物や台座の色使いに違いが見られます。



### 「鵜渡川原人形伝承の会」の活動について

「鵜渡川原人形伝承の会」は、平成9年（1997）に酒田市立資料館が主催した「鵜渡川原人形作り教室」をきっかけに始まりました。現在の会員数は10名で学校やコミセンを中心に、出前講座を実施していますが、令和2年（2020）度の活動はコロナ禍のために自粛しています。

鵜渡川原人形は江戸期から続く製法を守り、膠・胡粉・顔料（粉末）を用いて彩色しており、今では全国的にも珍しく、大きな特色のひとつです。

人形の常設展示は、酒田市交流ひろば1階、JR酒田駅待合室、鳥海山荘（季節ごと展示替え）のほかに、酒田市総合文化センター（作品展や正月飾り）、書の庵（雛街道）などで行っています。

平成11年（1999）に本家4代目の大石定佑氏が他界後は、妻のやぶさんと活動とともにしてきた本間光枝氏・松浦正子氏が平成19年（2007）に認定を受け、人形の制作と育成に励んでいます。

鵜渡川原人形伝承の会

☎ 31 - 2008

## 庄内の土人形

### 広田人形(ひろたにんぎょう)

酒田市の広田地区で作られた人形で、製瓦工場を営んでいた鈴木兵吉氏が、山形市の平清水焼人形を参考に昭和22年から同46年まで（1947～1971）製作していました。彩色後にニスを塗って艶を出す仕上げや、目の描き方に特徴があります。両羽橋の架け替え工事で集落が移転し、廃業となりました。



### 鶴岡瓦人形

鶴岡市大宝寺の尾形家で作られた土人形。

江戸時代末期の天保年間（1830～1844）に庄内藩の瓦師だった初代尾形喜惣治が、冬場の余技として始めたと伝えられています。

酒田での土人形作りには、上方から入ってきた人形のほかに鶴岡の瓦人形の影響もあったと考えられます。

